宮崎県誕生のあゆみ

「朝日の直射す国、夕日の日照る国…」とたとえられたこの〈日向〉の地は、「記紀」に描かれた〈日向神話〉をはじめ、ロマンあふれる伝承と、明るい陽光、豊かな自然に恵まれた私たちのふるさとです。古代から中世・近世へとつながる長い歴史を通じて、先人たちによる営々としたいとなみがありました。

わが〈宮崎〉は、どのようにして近代のあけぼのを迎えたのでしょうか。

明治政府により、明治四年（一八七一年）七月、「廃藩置県」が断行され、延岡・高鍋・佐土原・飫肥の四藩が廃止され、同年十一月、日向国には大淀川を境にして美々津県と都城県の二県が置かれた。その翌年には、県域の部分的な変更を行った。（府県三府七十二県）

その後、明治六年（一八七三年）美々津県と都城県を併合して、宮崎県とした。この置県を「初期宮崎県」という。明治九年（一八七六年）には、全国は三府三十五県にまとめられた。

初代の県参事（後の知事）は福山健偉である。福山は人民に宮崎県を意識させようと考え、政府の認可を得ないまま、明治七年（一八七四年）に新県庁舎を落成させた。県庁舎を中核として次第に市街地が形成され、県都・宮崎の中心部も発展し始めた。

しかし、その後県勢はなかなか進展しないまま明治九年（一八七六年）宮崎県は廃止され、鹿児島県に併合された。西南戦争終結後、戦後の始末や地域の発展を図る中で鹿児島県に併合されている不都合が次第に判明し、鹿児島県から分離独立する動きが起こった。

その中心人物が川越進である。

川越進を中心に多くの困難を乗り越えて「日向分県運動」が進められ、明治十六年（一八八三年）五月九日、ついに宮崎県が再置され、近代宮崎県がスタートした。

西南戦争と宮崎県

明治十年（一八七七年）二月十五日、明治政府樹立の中心人物である西郷隆盛と西郷のもとに集まった旧藩時代の武士、農民など一万五千の徒党が、軍事行動を起こし、熊本城を包囲して戦いとなった。西南戦争である。

この西南戦争に、日向国（宮崎県）から出兵したものは、旧士族・農民あわせて一万人とも言われている。

鹿児島を出た西郷軍は、熊本城を攻め優位に戦いを進めていたが、優勢な政府軍が熊本に向かって南下し始めた。これを阻止しようとする西郷軍が、熊本市郊外の田原坂で激突し、ここが西南戦争最大の戦場となった。両軍の衝突は二月二十二日から始まり、三月四日から激戦が続いたが、三月二十日に政府軍が西郷軍の陣地を突破したので、以後西郷軍は退却を重ねることになった。

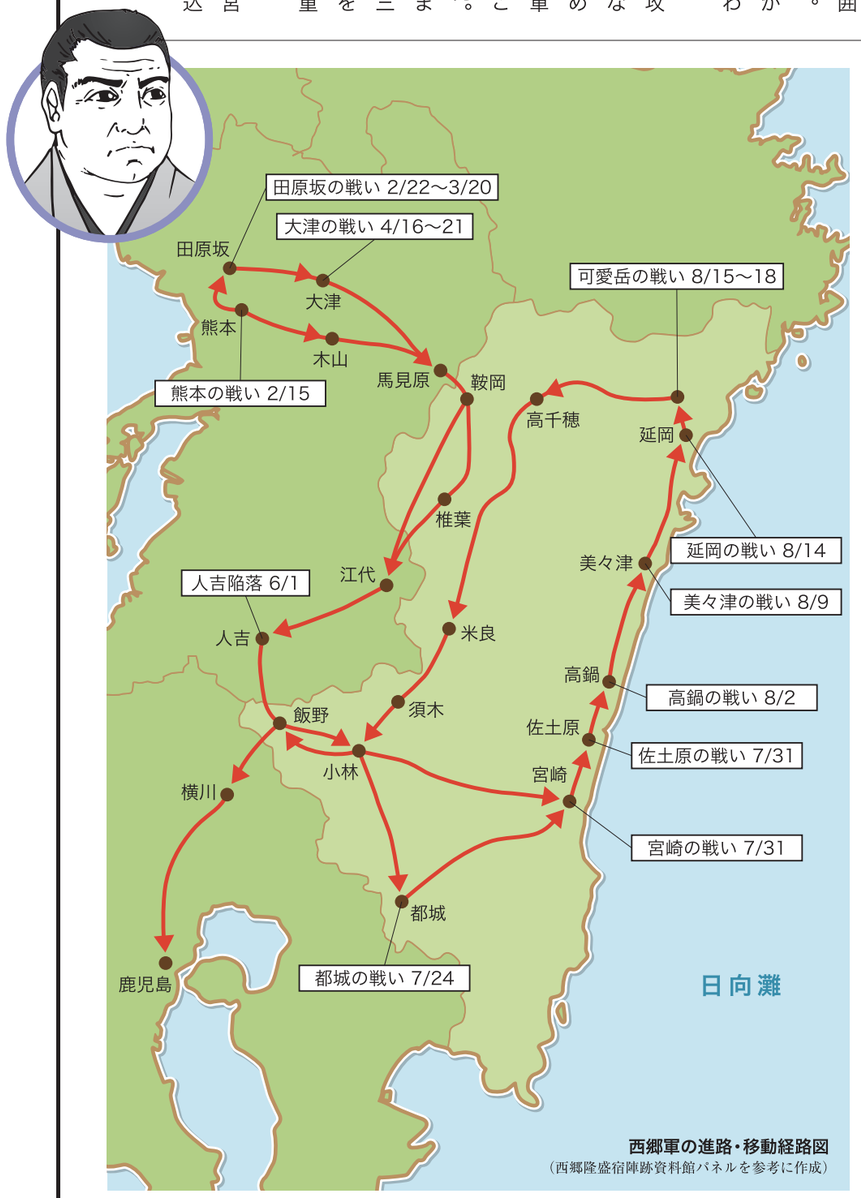
西郷軍は政府軍に追われ、都城、宮崎、佐土原、高鍋などを戦渦に巻き込んで延岡から北川の可愛岳の麓に包囲された。七月から八月の間、日向地域が戦場と化した。同年八月十五日、延岡から北川の戦いで西郷軍は崩壊し、政府軍に降伏した。

この戦いは宮崎県に大きな傷跡を残した。田畑が荒らされ、牛馬が徴発され、役所の公金が奪われた。

農繁期の人馬の徴発で農村は苦しみ、『西郷札』と呼ばれる西郷軍の紙幣の乱発で経済も混乱した。

また、宮崎県の将来を背負うべき若く有能な人材が、西郷軍に動員されて失われた。

西南戦争後、明治政府は殖産興業、文明開化政策を進めていったが、宮崎県にとって鹿児島県からの独立という大きな課題が残った。



西郷軍の進路・移動経路図
（西郷隆盛宿陣跡資料館パネルを参考に作成）

宮崎県の分県運動

鹿児島県会

明治十六年(一八八三年)三月

それでは「鹿児島県下日向国分離ノ建議案」につき決をとります。

出席議員四十一名中、賛成三十九名。よって、可決されました。

川越先生、やりましたね!! おめでとうございます!!

ああ藤田君、ようやく積年の望みがかなったな…

明治十六年(一八八三年)、二月末から三月末にかけての鹿児島県会で、「鹿児島県下日向国分離ノ建議案」が可決され、五月九日に宮崎県が再置された。

初代県令(県知事)は田辺輝実。

戸数七万八九一五戸、人口三七万七五五九人の出発であった。

初代県令 田辺輝実

宮崎県再置当時の県庁舎

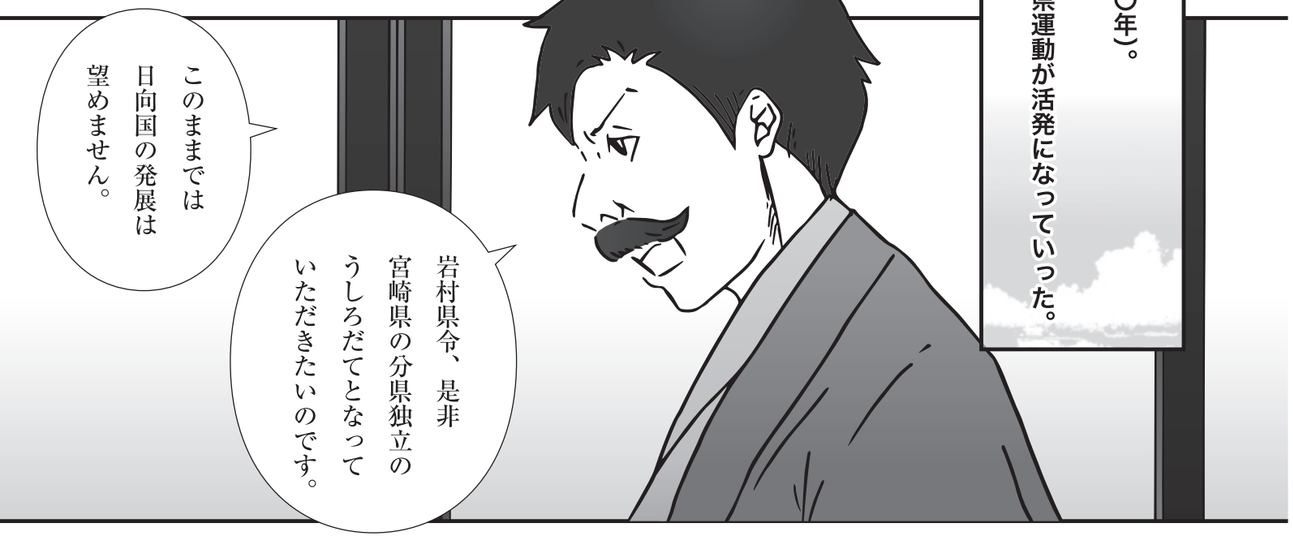
しかし、宮崎県が再置される道のりは、決して簡単ではなく、紆余曲折があった。

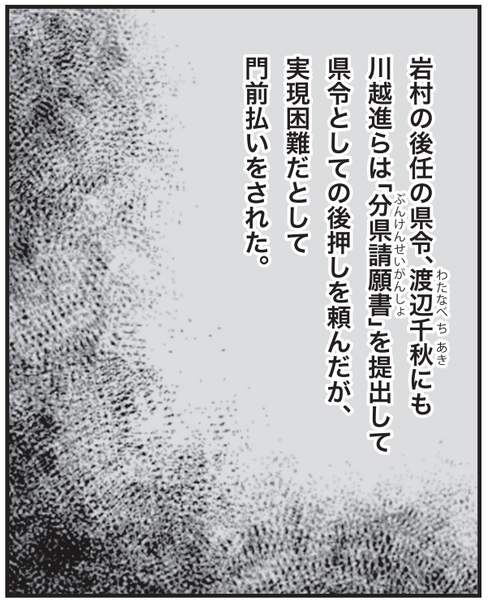
時はさかのぼって明治十三年(一八八〇年)。徳島県が高知県から分県した。それがきっかけとなり、宮崎県でも分県運動が活発になっていった。

当時、那珂郡選出の鹿児島県議であった川越進は、宮崎県再置の運動組織として「日州親睦会」を結成し、その代表となる。

分県運動時代の川越進

この頃地方巡視に来ていた鹿児島県令の岩村通俊に川越らは宮崎県再置の実現にむけて働きかけていた。



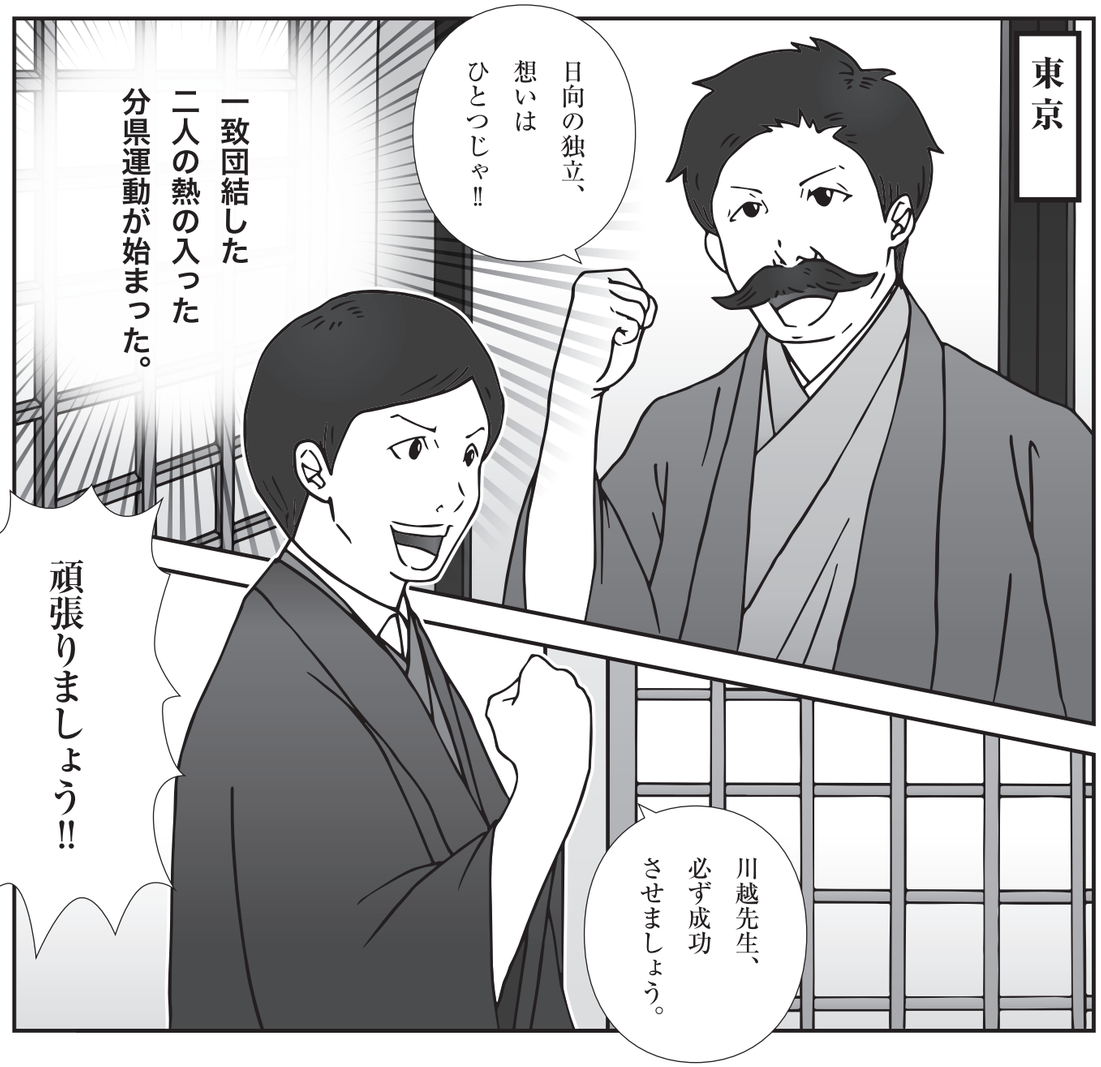


岩村の後任の県令、渡辺千秋にも川越進らは「分県請願書」を提出して県令としての後押しを頼んだが、実現困難だとして門前払いをされた。

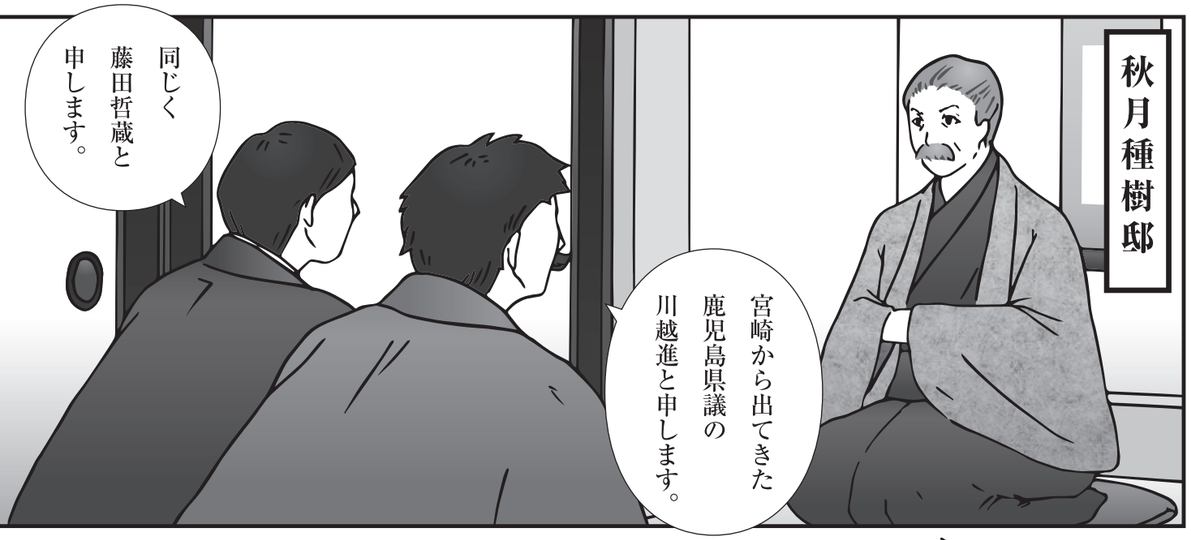
明治十四年(一八八一年)秋
臼杵郡恒富村(現在の延岡市)出身の
鹿児島県議 藤田哲蔵が
延岡から東京に向かう。

このとき、
藤田は弱冠二十六歳。

県令から門前払いされた川越進らだが、
宮崎選出の県議を中心に
分県運動は根強く続いた。
そして、元老院(のちの内閣)へ
請願することに切り替える。
その東京で、上京した川越と
藤田が出会うのである。



秋月種樹は高鍋藩主の弟であり、昌平黌で安井息軒に学びました。後に江戸幕府の学問所奉行となります。明治に入ってからは新政府に招かれ、明治天皇の侍読(個人教授)となるなどしました。



民衆の願いなのです!!
あきらめるわけには
いきません!!

もっともじゃ。
なんとかしてあげたいのは
私だけではないのだが…

どうしたら
いいのですか…

う〜む…
原因は
鹿児島の
反対派か…

このあと、川越と藤田の二人は
土方久元(内務大輔・のちの内務次官)
三好退蔵(高鍋出身・のちの大審院長)
伊藤博文(長州出身・のちの総理大臣)
山県有朋(長州出身・陸軍大将・参事院議長)
などの有力者を次々に訪問していった。

それは、有力者たちの心を
徐々に動かしていったのである。
そして、政府当事者より「分県のことは
鹿児島県会を通じて願い出よ」との情報を得た。

明治十五年二月
東京での八十日間の
独立運動を終えて、
川越、藤田が
宮崎に帰ってきた。

そして、同年三月
「日向国分離ノ建議案」
が鹿児島県会に
上程された。

残念で
なりません。
川越先生。

…しかし、僅差で
否決された。

あぁ、残念だ…
親しい大隅の議員たちに
声をかけておいたのだが。
もうひと押しだったか…

いや、分県がかなうまでは
まだまだ私はあきらめないぞ。

自由民権運動が
全国的な広がりを見せ、
分県の意識が民衆にも
どんどん広がった。
宮崎での弾劾演説会では
弁護士の岩切門二が
熱弁をふるった。

われら
宮崎県民の声を
代弁しろ!!

こら!!
渡辺県令!!

弁士中止!!
県令を愚弄するとは
なにごとだ!!

俺は逮捕されても
分県運動を続けるぞ!!

岩切門二は宮崎県再置に
貢献した一人である。
しかし弾劾演説で、
鹿児島県令の渡辺千秋を
罵倒し、検挙された。

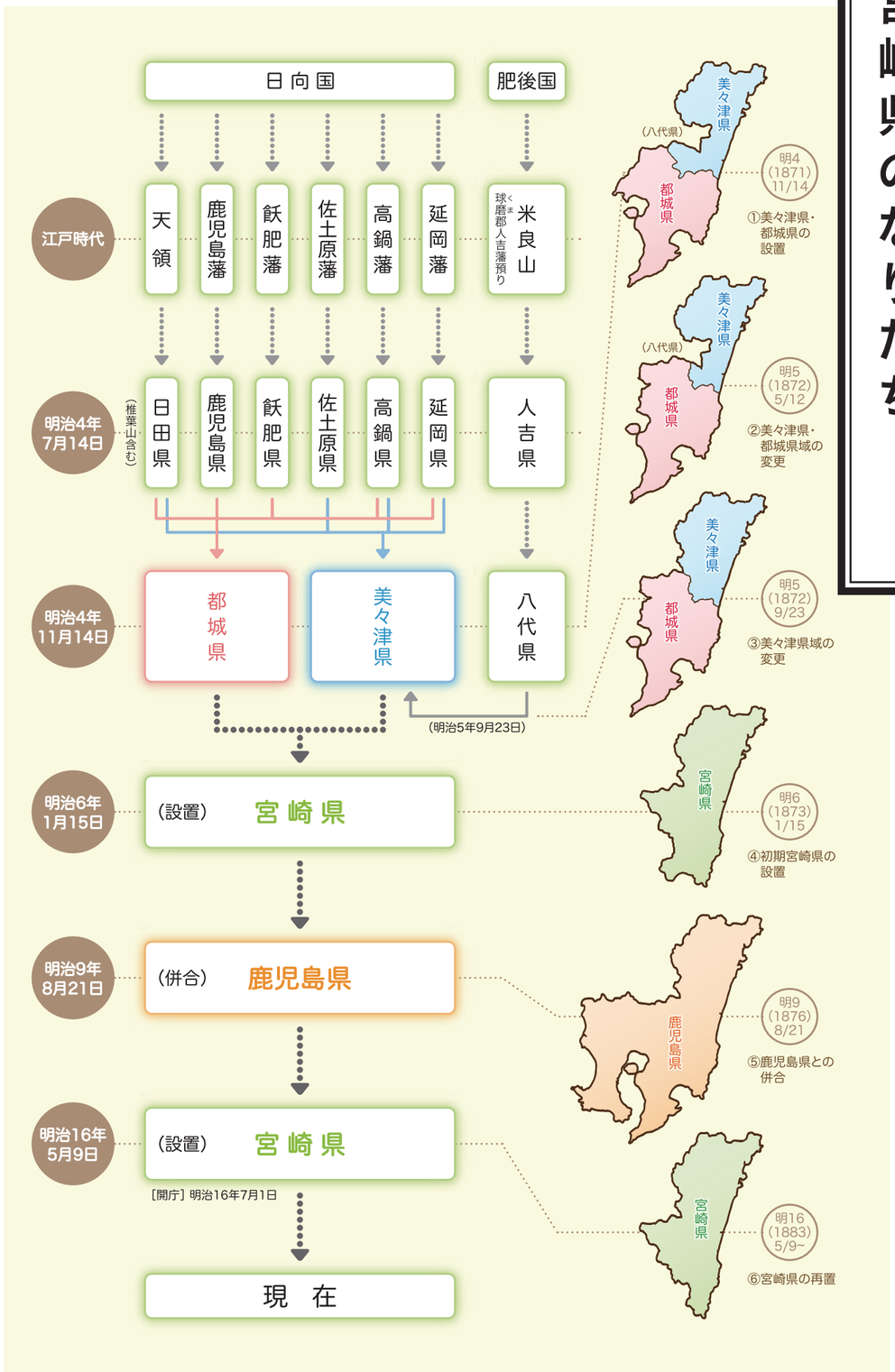
●その後の川越進

「日向国分離ノ建議案」が可決されると、川越進はさっそく上京し、鹿児島県会議長という立場で山田顕義内務卿に分県建議書を申達しました。

四月二十五日、参事院で「宮崎県ヲ置クハ適宜ノ分割ト認定ス」との結論が出され、三条実美太政大臣への上申を経て、五月九日に宮崎県再置の布告がなされました。

日向国有志たちの三年に及ぶ努力が、ここにようやく結実したのです。

七月一日に県庁が置かれると、川越は宮崎県会の初代議長に就任します。それと同時に、分県運動のころから皆と話し合ってきた、養蚕や茶の生産などのさまざまな振興策を建言し、新制宮崎県の発展に邁進しました。

また、明治二十三年(一八九〇年)には衆議院議員に選出され、国政の場で宮崎県の発展に寄与することになりました。

宮崎県のなりたち